

ロータリーの使命あるところならどこへでも

マーガレット・スー、世界平和奨学金第一期生学友、マレーシア出身、
津波の被害を受けたインドネシア、アチェ地方に関する報告

12月26日、インド洋で発生した津波によって、バンダアチェが世界に知られるようになった。以来数週間、海外からの救援チームがアチェ地方北部のこの町に押し寄せ、外部からスマトラへの第一の交通要所であるメダン空港はごった返して悪夢のような状況になった。クアラルンプールから飛行機で1時間のこの場所では、たくさんの団体や人々が数多くの救援募金活動を大々的に繰り広げ、近隣諸国の津波被災者を助けるためにできることなら何でも行っていた。マレーシアおよび海外の救援や医療関係者は、現在までに、バンダアチェ、スリランカ、タイ、インド、モルジブにまで救助の手を差し伸べている。人々が救済の手を求めている時にその助けとなることができるのは、真に素晴らしいことである。

マレーシアにある私のロータリー地区、第3300地区が現地視察のためにアチェに赴くことを決定した時、私はすぐさま参加を申し出た。ダト・ペルマル地区ガバナーの好意的な計らいで、私は、ダト・ジミー・リム地区ガバナー・ノミニのチームに配属された。「行くぞ！(GO!)」という掛け声と共に、クリスマスの翌日、私たちはメダンに向けて出発した。男女8名から成る私のチームには、イスラム教徒、ヒンズー教徒、中国系人、シーク教徒が含まれていた。150キログラムの医療援助物資やその他の備品を機内に持ち込み、マレーシア航空が無料で提供してくれた便に乗った。当日は、イスラム教徒が神との契約を更新する「犠牲祭」(訳注:羊や牛を犠牲にして捧げる)だったため、イスラム教徒たちが行う年に一度のこの儀式に私たちも参加できるよう、到着時に10頭の牛が届くよう注文しておいた。親善を大切にするこの行為は、「犠牲祭」の週にアチェに赴く私たちの基礎を築くものとなった。

メダン空港への到着は非常にスムーズだった。第3400地区のデリ・メダン・ロータリー・クラブのロータリアンが、私たちのために入管手続をすべて行い、数分のうちに40箱分の物資と私たち個人の荷物を運び出してくれた。1分の遅れもなく、1日のうちに、私たちはメダン郊外にある3カ所の非難所と病院を訪れることができた。

津波被災者によって語られた話は、私たちがそれまでに新聞で読んでいた内容と全く同じであった。疲れ切って抱いていた子供を手放してしまったことを自責する母親、襲いかかる高波から奇跡的に生き残ったものの、愛する家族を失い、避難所で絶望に暮れる幼児やお年寄りや男女。どの話からも、自然の猛威と闘う確固たる信念、勇気、意志が感じられた。クリスマスの翌日にソファでテレビを見ていた時に巨大な波にさらわれたサリパ・ノルマラさんという主婦の話を取り上げてみれば、泥が混ざり黒ずんだ海水にもまれ、ありとあらゆる種類の硬い漂流物で体を傷つけられ、地獄のような状況の中、必死に椰子の木にしがみついていたという。高さ30メートルの波に愛する家族を一瞬にして奪われ、勇敢に、しかし絶望的に椰子の木につかまって生き残った彼女に、この45分間に何が起こったのかを、世界に向けてどのように説明できるというのか。自然の恐ろしい猛威の真っ只中で彼女は何を考えただろうか。ほんの数秒前には2人の娘、妹、母と居間でテレビを見ており、愛する夫は音楽を聞きながら玄関先で車を磨いていたというのに。愛し合い、固い絆で結ばれた家族を、神はなぜ彼女から奪い去ったのか。水が引き、椰子の木から降りて泥の混ざった水溜まりの上を彷徨い歩く彼女が目にしたのは、あちこちに散らばった馴染みある顔の遺体だった。皆、強い衝撃によって命を落としていた。その翌日、サリパさんは、被災地中心部に最初に到着した医療救助チーム、マーシー・マレーシアの医師によって治療を受けた。その時、彼女は同じ町内に住んでいた5千人の住人のうち、混雑した病院で治療を受けて生き残ったのはわずか6人であることを知った。数日後、メダンに住む親戚が南部の都市に移動するためのフェリ

一を手配し、メダンから 12 キロのこの場所にある、倉庫を開放した避難所に、現在彼女は身を寄せている。サリパさんの話は勇気のお話である。

信念のお話は、メダンから 13.5 キロ離れたビンジャイ・ビントン・テランにある中国系人の家の中にもあった。78 歳の双子の姉妹は、津波が襲来した時、カトリック教会の礼拝に出席していた。神意に従う心の準備をし、ただ神への信仰心に満たされながら、この老齢の姉妹は互いにしっかりとつかまり合っていた。今日、このコー姉妹は、一つの傷も負うことなく、メダンの中国系ホームで心安らかに暮らしている。怖かったか、と私が尋ねると、姉妹の一人がいたずらっぽくウィンクして、中国系の方言で次のように答えた。「いいえ、全然。私は第二次世界大戦も生き残りました神の御心に従っていれば、決して恐怖を感じるなどありません」と。アチェ地方の人々は、大変強い信仰心を持っている。部屋にあった古い木製の棚につかまって生き残った若いイスラム系の未亡人、ケミさんのことを考えてほしい。猛威を振るう高波にさらわれた彼女が、アチェ川の対岸まで流され、モスク(礼拝堂)の安全な一角に辿り着いたことが何を意味するのかは、この津波被害の復興が一段落着いた後で、私たちがよく考えなくてはならないことである。

アチェの人々は大変な苦しみを経験したが、信仰心と不屈の精神と希望を忘れることはない。

日暮れまでに、私たちは、ロータリアンが費用を援助している 20 人の患者を見舞った。この患者たちは、ロータリアンによって迅速な医療措置の取れない公立病院から私立病院に転院し、デリ・メダン・ロータリー・クラブと病院の医師に治療費を負担してもらいながら、順調に回復している。ロータリーや医師による善行を通じて、私は、絶望の最中にも、人道的精神と希望を垣間見ることができた。出身地や話す言語が何であるかにかかわらず、ロータリアンによって示された慈愛、気遣い、慈善精神に、私は心を打たれた。

ロータリーやその他の機関が迅速に援助の手を差し伸べたおかげで、メダンの避難所に食糧や衣服、水を緊急に送る必要はない。避難所で必要とされているのは、カウンセリング、一人一人のための十分な空間、引き続きの医療救護、そして自信を取り戻し、生活や家を建て直すための資金である。

翌日私たちは、犠牲祭の祝賀で牛が犠牲になる光景を目の当たりにした。イスラム国出身の私でさえも、犠牲祭の儀式に参加したのは初めての経験だった。宗教的指導者もしくはイマーム(イスラム教の導師)が祈祷を捧げ、牛が屠殺された後、その肉や臓物、骨が慎重に切り取られて浄化され、貧しい人々や孤独な人々に与えられた。マレーシアとインドネシア出身のイスラム教徒のロータリアンが、この儀式の意味について私に辛抱強く説明してくれた。この独特な宗教的儀式を経験したことで、私は人間的に成長した。世界平和奨学生として日本へ留学していた時、私が注目したのは異文化間コミュニケーションであり、私の最大の関心は文化的な格差(ギャップ)の橋渡しをすることによって、対立の解決に取り組むことであつた。私はこのような体験から学びたいとずっと望んでいた。私は、自国にいる時には注意を払っていなかった多くの事を知りたいと思い、その場に残って、気さくで謙虚な屠殺人たち一人一人と話をした。私たちの地区が寄贈した 10 頭分の牛は、津波の被害に遭った 900 人から 1,200 人の家族たちに振る舞われた。

北のバンダチェに行く航空券が確保できなかったので、私たちは進路を変更して、アチェの西にあるムーラボを訪れた。ムーラボはメダンから 300 キロメートルに位置し、チャーター機で 1 時間、または車で 7 ~12 時間のところにある。この町は最西端に位置し、震源地に最も近かったため、もっとも被害が大きい地域であつた。3 日目、私たちは午前 7 時出発の小型チャーター機に乗って、ムーラボへ向かった。機上から見えたのはおびただしい破壊の痕跡だった。豊かな緑の地は黄色と茶色の地と化していた。ところどころに見えるモスク(礼拝堂)が私の目を引いた。アーチ型の入り口という独特の構造のため、モスク

は津波の猛威から逃れることができたのだ。なんと、ムーラボ周辺のモスクのほとんどが、この災害をよそにそのまま残っていた。廃墟の中で、神の怒りの証しを背負うかのように毅然として立ちそびえているのだった。

チュ・ニャ・デイン空港へは難なく着陸し、入国も TNI 軍が親切に取り計らってくれたおかげで一切問題はなかった。おまけに、私たちがマレーシアから来たことをありがたがっていた。田舎道を車で走っていると、インドネシアの国旗が秩序もなく地面に立てられているのがいくつも見えた。それは、発見され埋葬された遺体の一つひとつを告げるものだった。ムーラボの波ときたら、椰子の木の 2 倍の高さで 3 回連続で押し寄せてきたのだと言う。もう少し先に進んでいくと、ネズミの死骸の放つ悪臭に襲われた。そして、乗っていた四輪駆動のドアを開けるたび、蠅の大群が車の中に飛び込んできた。そして、私たちが嗅いでいるのは、目の前に広がる瓦礫の下に埋まっている死体の臭いなのだと悟ると、なんとも悲しくやりきれない気持ちだった。歩きながら、私は本能的に名もなき祈りの言葉を繰り返した。「健やかに眠れんことを、健やかに眠れんことを」と。しばらくするとだれもしゃべらなくなり、車は無言のまま走り続けた。みんな、目撃した光景に心を引き裂かれてしまったのだろう。

しかし、最大のショックを受けたのは、ムーラボの中心部に着いたときだった。町全体が、再三爆撃を受けたかのごとく、どこもかしこも瓦礫、残がい、廃物で埋め尽くされていた。家の上に船が覆い被さっていたり、船の上に家が載っかっていたりという、正に現実を超えた信じがたい光景というほかなかった。この無残な廃墟と死を一体子供たちに何と説明すればよいのか、見当もつかないものだった。黒いプラスチックの遺体袋に包まれた 2 体の遺体の前を私たちは通り過ぎた。発見されたばかりで、道路の片隅に置かれていたようだった。2 時間後に引き返したときには、遺体は 4 体に増えていた。私たちが歩いている間にも、地域の作業班によってさらにいくつかの遺体が発見されていた。私は、マレーシアのロータリアンがアチェの災害救済活動の一環として、ペナンの工場に 1000 枚以上の遺体袋の完成を急がせていたのを思い出し、「遺体袋があつてよかった」と思った。「遺体袋がなかったら、腐った遺体をどうやって拾わなければならなかっただろう」、そんなことが私の頭をかすめた。私は目撃した事実を冷めた心で受け止めている自分自身の反応に嫌気がさしていた。死は尊厳を伴っていなければならないと堅く信じてきた自分が目の当たりにしたのは、動物の死骸と変わらない人間の遺体だった。激しく揺さぶられる感情に私は蓋をしようとした。交錯する思いを締め出そうとしていると、煙が見えた。瓦礫の山から山へと移り始めた火がくすぶっていた。火を消すだけの水がないのだ。そのまま灰と化すまで放っておいたほうがよいのだろうか。ムーラボはまるで夕日に染まる戦地だった。廃墟や破壊された橋や火事の光景と臭いだけではない。道端に残された死体といい、空を覆う真っ黒な煙といい、漁り歩く人々…。何もかもが戦地そのものだった。なぜ、なぜ、なぜ、という問いが執拗に頭の中を駆け巡っていた。川沿いにたたくみ、ゴースタウンと化してしまった町を見渡していると、広島焼け野原のことが思い起こされた。「水、水、水…」と叫びながら川に飛び込んだという人々のことを。しかし、今回はその水が救い主ではなく、命取りとなってしまったのだ。

訪問したポスコスでは、インスタントラーメンにしかありつけず、小さなおなかを膨らませ、下痢に苦しむ子供たちがいた。大人はご飯にラーメンを混ぜたものに塩をまぶして食べていた。食糧の供給は量からいえば十分なのだが、栄養素がまったく配慮されていなかった。ブルと呼ばれる甘めのおかゆの原料として、PMI(インドネシアの赤十字)のメンバーがグリーンピースと砂糖を求めていた。このほうが食べやすく、蛋白質も豊富だということだった。母親たちは、離乳食や粉ミルクも必要としていた。また、女性たちは整理用ナプキンがなくて困っていた。私たちが持参していった量ではとても足りなかった。数人のスイスの救急医療補助員のほか、名古屋から来ていた日本赤十字チームや台湾を本拠地とした人道救済チーム(独立した医療クリニックを経営)の人々とも情報交換を行った。世界保健機関およびユニセフが毎日午後 5 時に医療調整の会合を行っていたが、私たちが訪問した日曜日には、会合はなかった。村の

至るところに UNHCR の白いテントが建てられていて、津波被災者がなだれ込んでくるのを待ち受けていた。

一日も終わりに近づき、宿を探すときがやってきた。私たちは地元のガイドが経営する金物屋の 2 階にある居間に身を寄せることになった。1 階の店は津波で見る影もなく破壊されていた。この心優しいガイドは、3 人の子供たちをメダンに送り、妻と二人、なんとしても早急に生活を立て直そうと、数人の近所の人々とともにムーラボに残った。夕食時になると、隣の人々も数人やってきた。私たちは順番に風呂に入り、夕飯の支度も手伝い、みんなで野菜と卵とメダンから持って来たニシンの缶詰を食べた。たったこれだけの質素な食事がなんと美味しく感じられたことだろう。そして、1階は混乱状態のままにあるというのに、2 階で私たちが受けたもてなしのなんと温かかったことか。食事の後、身の安全のため、私たちは大勢で身を寄せ合って眠りについた。その夜、マレーシアのロータリーからやって来た私たちは、ムーラボの赤の他人の家の難民となったのだった。忘れようにも決して忘れることのできない夜だった。

翌朝チュ・ニャ・ディン空港を後にして、インドネシアのロータリアンと早急な活動計画について話し合うためメダンへ向かった。第 3400 地区のメダン・ロータリー・クラブの協力を得て、第 3300 地区は、アチェ地方の津波被災者のためにロータリー・リハビリ・プロジェクトを計画している。このほかにも、地区内のほかのクラブがさまざまな募金活動を計画している。私自身も自分にできることがあればなんでもやりたいと思っている。

事実確認を目的としたアチェへの旅は、さまざまなことを教えてくれた実り多いものだった。地元のガイドやホストの方々に分かれを告げながら、メダンとムーラボにいつか戻ってくるだろうという気がした。見知らぬ旅人としてではなく、家族の一員として。バハサ・インドネシア、英語、客家、フーチェン、北京語と簡単な日本語が話せたおかげで、この旅はより意義深いものとなった。中国人は私を家族のように扱ってくれ、イスラム教徒は同胞のように抱きしめてくれた。旅の途中で知り合った和歌山県出身の日本人ジャーナリストまでが、朝の 7 時にムーラボ空港まで見送りに来てくれた。ロータリー国際親善奨学金として、また、世界平和奨学生としての体験と研究が、異文化間の障壁を乗り越える術を私に教えてくれたのだ。ロータリーが提供してくれた数々の研修や機会がどれほど私を鍛えてくれたか計り知れない。日本での研究を終え、世界平和奨学生を卒業する時期が来たと思っていた矢先、スマトラ半島にロータリー地区の事実確認チームの一員として旅する機会を与えられ、新しい友情を築き、また一つ新しい世界が開けた。ひょっとするとロータリーの世界平和の担い手としての私の使命は、始まったばかりなのかもしれない。

マーガレット・スー (Margaret Soo)
クアラルンプール (Kuala Lumpur)
2005 年 1 月 30 日